

「宇佐美圭司 よみがえる画家」展（東京大学駒場博物館）関連イベント

オンライン・シンポジウム

## 「よみがえる画家／よみかえる眼」

2021年5月30日（日）午後2時～6時

本シンポジウムは、戦後日本美術をはじめとする近現代美術を研究する専門家を招いて、宇佐美圭司氏に関する議論を多様にすることを目指しています。他の美術家との関係、戦後日本美術の中での位置、同時代の美術や文化との関係などについて検討し、宇佐美氏の再評価のための言説の基盤を作ることができればと考えています。

挨拶：三浦篤（東京大学駒場博物館館長、東京大学大学院総合文化研究科教授）

講演：「たとえば、高松次郎と比べてみる」

蔵屋美香（横浜美術館館長）

講演：「透明板とひびわれ 宇佐美圭司 人型の影の影」

光田由里（多摩美術大学アートアーカイヴセンター教授）

講演：「デュシャンピアンとしての宇佐美圭司」

平芳幸浩（京都工芸繊維大学デザイン・建築学系教授）

講演：「宇佐美圭司の絵画以外」

成相肇（東京国立近代美術館主任研究員）

講演：「かつて宇佐美圭司と、宇佐美圭司について、考えたことと考えようとしたこと、いま考えていること」

岡崎乾二郎（造形作家、東京大学大学院客員教授、武蔵野美術大学客員教授）

ディスカッション

司会：加治屋健司（東京大学大学院総合文化研究科教授）

参加費無料、事前登録制（先着順 500 名）

登録 URL

[https://u-tokyo-ac-jp.zoom.us/webinar/register/WN\\_tpyLSGGYS9ynqif8qEM16g](https://u-tokyo-ac-jp.zoom.us/webinar/register/WN_tpyLSGGYS9ynqif8qEM16g)

## 登壇者略歴

岡崎乾二郎（おかざき・けんじろう）

造形作家、東京大学大学院客員教授、武蔵野美術大学客員教授。1955年東京生まれ。1982年パリ・ビエンナーレ他、「ヴェネツィア・ビエンナーレ第8回建築展」（2002年、日本館ディレクター）、現代舞踊家トリシャ・ブラウンとのコラボレーションなど。豊田市美術館で開催された「抽象の力 現実（concrete）展開する、抽象芸術の系譜」展(2017年)を企画。主な個展に「視覚のカイソウ」（豊田市美術館、2019-20年）、「TOPICA PICTUS たけばし」（東京国立近代美術館、2020年）。著書に『ルネサンス 経験の条件』（筑摩書房、2001年、文藝ライブラリー、2014年）、『抽象の力 近代芸術の解析』（亜紀書房、2018年、第69回芸術選奨文部科学大臣賞）、作品集に『視覚のカイソウ』（ナナロク社、2020年）、『TOPICA PICTUS』（urizen、2020年）。

蔵屋美香（くらや・みか）

横浜美術館館長。千葉県生まれ。千葉大学大学院修了。東京国立近代美術館企画課長を経て、2020年より現職。主な展覧会に、「ビデオを待ちながら 映像、60年代から今日へ」（2009年、東京国立近代美術館、三輪健仁と共同キュレーション）、「ぬぐ絵画 日本のヌード 1880-1945」（第24回倫雅美術奨励賞、2011-12年、同）、「高松次郎ミステリーズ」（2014-15年、同、保坂健二郎、榊田倫広と共同キュレーション）、「藤田嗣治、全所蔵作品展示。」（2015年、同）、「没後40年 熊谷守一 生きるよろこび」（2017-18年、同）、「窓展 窓をめぐるアートと建築の旅」（2019-20年、同、五十嵐太郎と共同キュレーション）など。第55回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館の田中功起個展「abstract speaking: sharing uncertainty and other collective acts」（2013年）で特別表彰。おもな著作に『もっと知りたい 岸田劉生』（東京美術、2019年）、『現代アート10講』（共著、武蔵野美術大学出版局、2017年）など。

成相肇（なりあい・はじめ）

東京国立近代美術館主任研究員。府中市美術館学芸員、東京ステーションギャラリー学芸員を経て現職。日本のアヴァンギャルド芸術を中心に調査研究を行い、マンガ、大衆誌、広告ほか複製文化と美術をまたぐ領域横断的な展覧会を企画。主な企画展に「石子順造の世界」（府中市美術館、2011-12年）、「ディスカバー、ディスカバー・ジャパン」（東京ステーションギャラリー、2014年）、「パロディ、二重の声」（同、2017年）など。

平芳幸浩（ひらよし・ゆきひろ）

京都工芸繊維大学デザイン・建築学系教授。国立国際美術館主任研究員を経て現職。専門はマルセル・デュシャンを中心とする近現代美術史。著書に『日本現代美術とマルセル・デュシャン』（思文閣出版、2021年）、『マルセル・デュシャンとは何か？』（河出書房新社、2018年）など。共編著に『芸術の価値創造 京都の近代からひらける世界』（昭和堂、2021年）。

光田由里（みつだ・ゆり）

多摩美術大学アートアーカイヴセンター教授。富山県美術館ほかで学芸員として勤務。20世紀美術史・写真史。著書に『高松次郎 言葉ともの』（水声社、2011年）、『写真、芸術との界面に』（青弓社、2006年）ほか。共著に *The New world to Come: Experiments in Japanese Art and Photography* (New Haven: Yale University Press, 2015)、*Provoke: Between Protest and Performance: Photography in Japan 1960/1975* (Göttingen: Steidl, 2016)など。企画展に「ハイレッド・センター 直接行動の軌跡」（2013-14年）、「鏡と穴 写真と彫刻の界面」（2017年）、「描く、そして現れる 画家が彫刻を作るとき」（2019年）など。

加治屋健司（かじや・けんじ）

東京大学大学院総合文化研究科教授。東京大学芸術創造連携研究機構副機構長、日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ代表も務める。専門は現代美術史、表象文化論。著書に『アンフォルム化するモダニズム カラーフィールド絵画と20世紀アメリカ文化』（東京大学出版会、近刊）、共編著に *From Postwar to Postmodern, Art in Japan 1945-1989: Primary Documents* (New York: Museum of Modern Art, 2012)など。